



がら、

「ここは食べ物もいっぱいあるし、安全だし、なぜそんな遠いところまで旅をしなければならぬの？」

と聞いてみました。

ほかの兄弟たちも、まったくむかぬ心です。

「そうだ！ぼくひとりでも幸せをさがしにゆこう！」

マツクは一人木をおり、町をめざしてはい出しました。

そこは、アマゾンのみつ林のようでした。マツクは草や小石をのりこえ、落ち葉の下をくぐってひたすら進んでいきます。

しばらくは歩いていけると、前方の草が風もないのにゆれていました。

よく見ると、大きなカマキリがマツクをねらってゆつくりと近づいてきます。

マツクはきょうふで動けません。

その時、草むらの中から恐竜のようなトカ

ゲが現れ、カマキリをパクリとひとのみにして、ゆうゆうと歩いていきました。

その夜は、星がこぼれおちそうに光っていました。

ね場所をさがしていたマツクがもぐりこんだかれ葉の中には、すでに年をとった黒い甲虫がいました。マツクを見て飛び上がりましました。

「おどかさないでおくれよ。ヤモリでも出たかと思っただじやないか」

「すみません。こんばんねるところをさがしていたのです。おじいさんは何という虫ですか？」

「わしはゴミ虫じやよ。まったく人間にはひどい名前をつけられたものじやよ。おまえさんはイモムシじやが、これもあまりいい名前だとはいえないね」

「ぼくは遠くの町までゆきたいのです」  
「ゴミ虫はじつとマツクの顔を見ました。」

「ぼうやはゆうかんだね。わしはもう年だ

けれど、ぼうやなら知らない世界でぼうけんをして、幸福になれるかも知れないね」

マツクはゴミ虫のとなり横になると、疲れがどつと出て、すぐねむくなってしまうました。

よく朝、親切なゴミ虫は、マツクを背中にのせて、キャベツ畑まで運んでくれました。

「町にいったら、人間に注意するのだよ。人間はチョウチヨヤトンボなんかのきれいな虫はすきだけれど、イモムシはきらわれているからね」

「ゴミ虫さん。ありがとう」

マツクは、キャベツの中にもぐりこんで、そのキャベツを朝ごはんにしました。

やがて、キャベツは農家の人によって荷馬車にのせられ、町へと運ばれました。

そしてキャベツは大きな船にのせられ、青いゼリーのような海原に進んでいきました。

マツクはキャベツを食べながら何日も過ごしていましたが、外に出てたんけんしてみる

ことにしました。

そこは、暗い倉庫でしたが、出会ったネズミに「ここは、おまえさんのようなぶかつこ  
うな虫のいるところじゃないよ」とおい出さ  
れました。

次にマックが入った台所の冷ぞう庫の底に  
は数匹のゴキブリがいました。

ゴキブリたちは、口々にマックをのしり  
ました。

「まあ見てごらんよ。ブヨブヨして、なん  
てきみがわるいのだろう」

「ここはぼくたちの家なのだから早く出て  
いきなさいよ」

同じ虫のなかまからも、ひどいことをいわ  
れたマックは、とてもかなしい気持ちになり  
ました。

マックはとぼとぼと船をさまよって、かん  
ぱんに出ました。

すると、マックはとつぜん大きな波にさら  
われて海に落ちてしまいました。

マツクは海中深くしずんでいきましたが、  
ぐうぜん海底からうかび上がってきた海ガメ  
によつて助けられました。  
マツクの話聞いた海ガメは、友だちのカ  
モメに、マツクをどこかすてきなところまで  
運んでくれるようにたのんでくれました。  
カモメは、マツクをせにのせると、海辺の  
白いきれいなお城まで運んでくれました。  
その夜、お城では、はなやかなぶとう会が  
開かれていました。  
まどから部屋に入つて、シヤンデリアの上  
からのぞいていたマツクは、きれいなお姫様  
を見ようとして足をすべらせ、貴婦人のかた  
の上にポタツと落ちました。  
すると貴婦人は、大きな悲鳴をあげて気ぜ  
つしてしまいました。  
侍女はさも汚いものでもさわるように、顔  
を遠ざけながらマツクを紙に入れて丸めると  
、お堀の中にすててしまいました。  
ところが、水に落ちるすん前に強い風が吹

いて来て、紙につつまれたマックは、くるくるまわりながら星空に向かって飛ばされていきましました。

紙のボールは、いくつもの山々や、川や畑や町をこえていき、朝になってピックルという小さな女の子の足元に落ちてきました。

ピックルは丸まった紙を開いておどろきましました。

「あら！　こんなところにかわいい虫がいるわ」

ピックルはマックを家に持って帰り、大切に育てました。

でも、ピックルの家に来たしんせきのおじさんは、マックを見て顔をしかめました。

「こんなふけつ虫は早くすててしまいなさい！」

「これは、毒ガになるにきまっているよ」といっしよに来た男の子はいいました。

「この子は私の大事なお友達なのよ！」  
ピックルはそういってマックをかばいました

た。  
マツクは何度も服をぬぐうように、古い皮をぬぎすてて大きくなってゆきました。  
やがて夏がすぎ秋になると、マツクはまどの外に出てガラスに登り、茶色のサナギになりました。  
「あんなところに、がい虫がくつついているよ」  
道ゆく人たちの中には、サナギを指差してあざわらうものもいました。  
冬になり、雪や寒い北風にさらされたサナギは、ちようこくのように動きません。  
「この子は死んでしまったのかしら？」  
とピツクルは心配しました。  
でも、これを大自然のふしぎというのでし  
ようか？  
小さなサナギには、きせきがおこっていた  
のです。  
ある月の美しい夜、サナギの背中にひびが入りました。

あ	く	る	朝	ピ	ク	ル	が	ま	ど	を	見	る	と	、	そ	こ	に		
は	朝	日	を	あ	び	た	つ	ゆ	の	よ	う	に	か	が	や	く	、	美	
し	い	青	い	チ	ヨ	ウ	チ	ヨ	が	と	ま	っ	て	い	ま	し	た	。	
こ	れ	が	、	あ	ん	な	に	き	わ	れ	て	い	た	イ	モ	ム	シ	の	
マ	ツ	ク	な	の	で	し	よ	う	か	？									
そ	の	青	い	よ	う	せ	い	は	、	し	ず	か	に	羽	ば	た	く	と	
、	ゆ	め	の	よ	う	に	フ	ワ	リ	と	宙	に	う	か	び	ま	し	た	。
「	さ	あ	！		入	っ	て	お	い	で	！	」							
ピ	ッ	ク	ル	は	両	手	で	ま	ど	を	開	け	放	ち	ま	し	た	。	
マ	ツ	ク	は	ピ	ッ	ク	ル	の	ま	わ	り	を	、	そ	よ	風	に	あ	
そ	ぶ	サ	ク	ラ	の	花	び	ら	の	よ	う	に	ま	い	ま	し	た	。	
そ	し	て	、	マ	ツ	ク	は	ピ	ッ	ク	ル	の	頭	に	そ	っ	と	と	
ま	り	ま	し	た	。														
そ	の	よ	う	す	は	、	ま	る	で	か	わ	い	ら	し	い	青	い	リ	
ボ	ン	の	よ	う	で	す	。												
や	が	て	マ	ツ	ク	は	、	ど	こ	ま	で	も	す	み	き	っ	た	青	
空	へ	向	っ	て	、	パ	ツ	と	飛	び	立	ち	ま	し	た	。			